

こだわりにこだわる

田中 三保子

えてしまうか、きっとそんな器用なことでもできないから、さっさとこの世界から足を洗っていたら。めんどうな「こだわり」に足をつっこんで、小人の目と足をもって、地下のミクロの旅をすることなどなかったら。適当な距離から面白がって見てもらえたら、小人はいい気になって「こだわり」を歩いてこれたのではないか。そう考えると、教育されなかったわけではないけれど、それ以上に、私はいい形で「保育」されたのではないかと思う。「保育」の原義も知らないままいうのは不遜だけれど、その子が今持っているものを保ちながら、そこから育っていくのを助けるのが「保育」であるとする、私はいい年をしていい保育を受けたような気がする。そのおかげで、自分の視線や感覚を保ちつつ育んでいくような「こだわり」を、どこかでひっそりと楽しんでいられるのだ。

(聖学院大学講師)

日常の保育の中での子どもの「こだわり」について考えてみると、二つの側面があるように思う。それぞれについて実例をあげて考察してみたい。

〈事例1〉

A夫が珍しく私のところにやってきた。「手に爪のついたのが作りたい」という。具体的な形がわからないので、あれこれ聞きながら作ってみる。手甲（てっこう）に三本の長い爪がついたようなものらしい。人の爪のように丸みを帯びていて、なおかつ先端が内側に曲がっているのがいいのだという。ボール紙を湾曲させて微妙な曲線を作るのにちょっと手間とる。紙の目に逆らう方向はきれいに曲げにくいからだ。私が試みる間、A夫は額に縦じわを寄せてじっと手元を見ている。爪の曲がり具合が気になるらしい。それらしいものが一つできると、顔がぱっと輝いた。そして「もう一つ作っておいてね」と念を押して、安心したように遊びに行った。その後で男の子が二人、A夫と同じものが欲しいといってくる。今度は私が曲がり具合にこだわって作ったのだが、彼らはそんなことよりも、少しでも早くできることの方にこだわっているようであった。

A夫は爪の微妙な曲がり加減にこだわった。彼がもう少し年少であったなら、その後で同じものを欲しがった子ども達のように、「似たようなもの」で満足してくれたかもしれない。A夫にははっきりしたイメージがあつて、細かいところまで見分けているからこだわったのだ。細部にこだわるということは、それを弁別する力が育っていることを示しているといえよう。子どものこだわりをきちんと受けとめ、その意味するところを理解

いう形で表現しているのだと思われた。

男の子のなかには今までつけたことのないエプロンをいやがる子がときどきいる。けれども幼稚園の生活が近しいもの、好ましいものになってくると、こだわりがとれて特別なことと感じなくなるようである。私はB夫に一方的に集団の規範を押しつけないと思つた。B夫がいつか自分から受け入れてくれるのを待ちたかつた。エプロンは母親から受け取つてコートかけにかけておき、帰りに一応促してみることにした。B夫はアトピーがあつて手の皮がところどころむけている。それもあつて手を洗いたくないのだらうと思ひ、手洗いは彼の手をとつてそつと水をかける程度にし、うがいをいやがれば、コップはさりげなく元に戻すことを繰り返した。

そのうちに、こんどはいつの間にか靴と靴下を脱ぎ捨てるようになった。だんだん暑くなってきたし家では裸足であろうから、その方が気持ちがいいとは思ふ。帰り際に履かせようとしてもいやがつていたのだが、ひと月ほどすると、靴下と靴は履いてくれるようになった。六月半ばのある朝、登園してきたときに母親に言われた。「今朝はエプロンをしていることに気がついていません」。その日から不思議にB夫はエプロンに全くこだわらなくなつた。うがいの、一学期末には私がコップを手渡せばするようになった。

初めから何のこだわりもたなければ、B夫は幼稚園生活をもつと楽しめたのに違ひない。それでもこだわらざるをえなかつたのであろう。私としては、B夫がこだわっている

